

財政の逼迫です。これは雪氷学会のみならず、ほとんどの学会が抱える難問です。幸い雪氷学会は、財務委員長ほかの皆さんの努力により、何とか問題の重大化を防いでいます。しかし、財政健全化はこれからも続く大問題ですので、この誌上

を借りまして、今後も会員皆様の協力、努力をお願いいたします。

以上、功績賞受賞の感謝を述べてきました。今後も会員の皆様の努力と協力により、雪氷学会が発展し、明るい未来が開けることを確信しています。

功績賞受賞に際して

国立大学法人総合研究大学院大学監事

国立極地研究所名誉教授 渡辺 興亜



南極・ヒマラヤ等の極地科学開拓と学会の発展推進という二つの面での、これまでの私の業績、役割を評価いただき、感謝している次第です。私個人の立場から言えば、前者の科学分野ではいくらか新しい分野の構築に役立ったかとは思いますが、これらについては学術賞、学会特別表彰等で十分評価いただいております。さらに功績賞までいただいておりますというのが率直な心境です。

私の氷河研究の始まりは1963年にヒマラヤ登山の途中、ネパール最西北部のタクプー氷河の観測をしたのが始まりです。視準鏡付きの簡易コンパスで氷河図を作成し、ローソクの光で結晶構造をスケッチという極めて初歩的な観測でしたが、初めて目にした氷河現象から感動に近い教示を受け、結局、研究者としての方向を決めたようです。ヒマラヤにはじまるアジア高山域の日本の氷河研究は、チベット、天山、崑崙へと拡大し、いまでは全地球規模の観測となっています。その初期の部分の活動に対して過分の評価をいただいたと考えています。

南極における広域雪氷観測計画の構想は、昭和基地-南極点旅行の成功を土台に内陸展開を計りたいという考えから始まりました。当時の昭和基地南方の内陸域は「地図の空白部」に近く、そこでの氷床の成り立ちの研究は当時の若者の魂を揺さぶる研究課題であったと思います。

1966、68年のアメリカ隊による、グリーンラン

ド、南極での氷床全層掘削成功の報は内陸基地建设の動機となり、氷床掘削の長い歴史の始まりでした。30数年後に、当初の構想をほぼ実現することができましたが、この成功は多くの人々の努力、苦難の蓄積です。もし、私に功績があるとすれば、その所期の目的の方向を保ち続けた事でしょう。

学会の発展に特に寄与したという実感はありませんが、授賞理由にある学会の総支部化に関しては大いに努力いたしました。私が名古屋大学から国立極地研究所に移った頃は、思えば学会の変換期であったと思います。やはり、北大を定年で辞められ、ICUに赴任された東晃先生も学会運営に参加され、先生が総務委員長、私は総務理事として、まず学会役員の選挙制度の導入という課題に取り組むというより、取り組まされ、引き続いての総支部化です。総支部化と分科会を縦糸、横糸として学会を織りなし、活性化を図るという当時の構想が成功したのかどうかは気になるこの頃です。

参考資料

渡辺興亜、上田 豊、2001：ヒマラヤ氷河調査事始め。

雪氷、63、147-157

渡辺興亜、2002：わが国の南極雪氷研究の歴史と今後の課題。雪氷、64、329-339

渡辺興亜、2000：回想「広域積雪化学観測の道筋」。雪氷、62、279-285